

## 研究論文

「科学」に依存しない知識の可能性と物語りのリスク<sup>1)</sup>

— 「知識生産」を「フィードバック」から再考する —

荒川 歩<sup>2)</sup>Science-independent Knowledge and Risk of Story:  
Reconsider “Knowledge Formation” from “Feedback”

ARAKAWA Ayumu

Although feedback to the field seems important in field psychology, it can cause problems, seemingly due to discrepancies in context between researchers and others. This paper discusses (1) how scientific knowledge sometimes displaces other types of knowledge in spite of discrepancies between scientific and social values; and (2) the potentiality of science-independent knowledge based on social values. Some science-independent knowledge may be harmful to some people; minimizing this risk does not require that science-independent knowledge is scientifically true, but it does require that the risks and benefits for potential consumers are clarified before the knowledge is distributed. In addition, this paper shows that it is not necessary to describe an “appropriate” story, and points out the significance of relativizing a viewpoint by describing an “inappropriate but possible” story.

**Key words** : Inappropriate story, risk of story, science-independent knowledge

キーワード : ありうる物語, 物語りのリスク, 科学に依存しない知識

0. 心理学における「科学的知識」とその社会  
における受容との関係

- 1) 本研究の作成に当たり、日本学術振興会 人文・社会科学振興のためのプロジェクト研究事業「ボトムアップ人間関係論の構築」プロジェクトの援助を受けた。また、本研究の作成に当たり、立命館大学大学院文学研究科の水川敬章氏から文学的・哲学的側面から重要な示唆を、吉岡昌子氏から社会的妥当性についての情報をいただいた。また、次世代人間科学研究会のメーリングリストにおけるやり取りにおいて、メーリングリスト参加者の皆様から多くの示唆をいただいた。この他に、匿名の2名の査読者の先生から、的確なコメントをいただきました。ご教授いただいた方々にお礼申し上げます。なお、誤解や理解不足の点は筆者の責任である。

心理学者の中には、学範囲の興味で産出された「科学的知識」は正しいので、そのまま社会に「応用」可能だと考える素朴な信念があるように思われる<sup>3)</sup>。大学等のカリキュラムにおいて頻繁に用いられる、「基礎」と「応用」とい

2) 立命館大学人間科学研究所

3) たとえば、日本認知心理学会の設立趣意書には下記のような文言がある。

「ここ二、三十年の間の認知心理学研究の結果として蓄積されている『社会に還元可能な研究成果』を表舞台に出していく…(略)…成果の蓄積を基に、将来、社会に貢献できる専門家を養成し、世に送り出していくという『学問領域としての責任』」  
 (「日本認知心理学会」(仮称)設立趣意書：<http://cogpsy.jp/setsuritsu.html>にて2005年11月30日確認)

う枠組みの作り方自体がこの信念を反映しているといえる<sup>4)</sup>。

しかし、正しいはずの「科学的知識」も3つの問題を抱えている。第1に、正しいはずの「科学的知識」でも、それを当事者に返す際には問題が起こる場合がある。たとえば、日本発達心理学会の「心理学・倫理ハンドブック—リサーチと臨床」(古澤・斉藤・都築, 2000)の、心理テスト法に関する章の中には、「協力者・保護者・仲介者への結果報告」場面について下記の5つの注意点が記述されている。正しいはずの「科学的知識」を伝えるだけなのに、なぜこのような配慮が必要なのだろうか。

- ① 協力者に一方的に説明を押し付けない。
- ② 協力者が利用できる情報を選び、分かりやすい言葉を通して伝える。
- ③ 協力者が気づきつつある(意識し始めている、自我親和性の)情報内容を明確にして伝える。
- ④ 評価的表現よりも行動や態度の記述的表現をできるだけ用いる。
- ⑤ フィードバックのフィードバックをもらう。

これまで、学範において生産された知識と社会におけるその受容の関係については、様々な領域で論じられてきた。例えば、その例として教育心理学の文脈における、「教育心理学の不毛性論争」(奈須・鹿毛・青木・守屋・市川, 1993; 鹿毛, 2002; サトウ, 2002)や、フィー

ルドワークにおける「フィールドワーカー・ショック」(Wagner, 1981)の問題をあげることができる。なぜこのような問題が起こるのかに関して奈須ら(1993)はこれまでに学会で行われた、研究と実践の関係についてのシンポジウムの内容をまとめ、それらに共通して見られる批判のポイントとして(1)科学至上主義、(2)哲学・歴史性の欠如、(3)社会性・責任性の欠如、の3点を挙げている。

「科学的知識」が抱える2つ目の問題点として、科学的知識が、それ以外の知識を駆逐している可能性が挙げられる。例えば、筆者が聴衆として参加した、保育実践に関するある研究会に同じく聴衆として参加していた実践者の一人は「最初は具体的な問題にどう対応すればよいのかという話を聞きに来たのに全然そういう話ではないのがっかりしていたけど、最後まで参加してみてこういう話もいいかなと思いました」といった感想を漏らしたことがある。このことは、科学的知識の功罪両面を示している。その第1は、科学的な文脈が、当事者が本来持っていた文脈や問題意識をすり替えてしまっている可能性であり、第2は、科学的な文脈が、当事者が埋め込まれていた文脈を脱構築する機能を果たす可能性である。

「科学的知識」の3つ目の問題点として、自然科学の方法論を、人文・社会科学にそのまま適用可能か否かという問題が挙げられる。確かに、科学的知識は、人を月まで運んでいき、またこれまで治療が困難であった疾患を治療可能なものにしてきた。このように、これまで科学が社会に対して果たしてきた役割の大きさが科学に対する人々の信頼感へと繋がっていると考えられる。しかし、上記のような自然科学と心理学などの社会科学とは、対象が人の心そのものである点において決定的に異なる。人の心を対象とした学問は、物質を対象とする学問よりも、人間の幸福という科学の目的に常に照らし

4) 心理学の知識観は、西村(2001)が、「明証性と普遍性を偏重する合理主義の社会観」に近い。それは下記の3つの特徴をもつとされている。

- ①科学的発見の受動性(「観察対象が発信するデータを『正しく』受信できさえすれば、真理に接近できる」)
- ②社会の発展の法則性(「社会は理性的な秩序へと向かう」)
- ③知の探求の専門性(「知の探求はごく少数の専門家=科学者の手に委ねられる。その他大勢の人々は、至高の知としての科学的知を模倣するに過ぎない」)

で知識生産を考える必要があるだろう。

そこで、本論では、主として心理学を対象として、従来の知識観の問題点を整理したうえで、そのオルタナティブとして、社会にとって受容可能な知識形態としての「物語りとしての知識」の有効性を論じる。

## 1. 従来の「知識観」の問題点：「科学的知識」はなぜ社会的に受容されない場合があるのか？

この章では、学範内において産出された知識の社会における受容の問題について、①「現象」の文脈依存性と学範という文脈の特殊性、②知識生産の手法としての推計学とその適用の問題、の2点から論じることで、従来の学範主導型の知識生産の問題点を記述する。

### 1.1 「現象」の文脈依存性と学範という文脈の特殊性

「現象」は、測定の問題と切り離すことができない。それは、科学論においては、「理論負荷性」(Hanson, 1958)として論じられてきた問題である。心理学においても、社会構成主義の立場では、「現象」が文脈に依存して観察されることが指摘されている。例えば、松嶋(2005)は、社会構成主義の「現象」に対する考え方を整理して、(1)「現象」が、それを見る私たちの視点とは関係なく、あらかじめ存在するという立場をあえて留保する；(2)むしろ「現象」は、人々がくいま—ここ>の文脈において、それに関わるなかで「言語」を媒介として作りあげたものだという立場をとる；(3)研究者は「現象」に対して、自分とは関わりのない立場から一方的にそれを観察する(外在的立場)とは考えられず、研究者もまたその現象の一部であり、現象の生成に一役かっていると考えられる、の3点を指摘している。

当事者のコンテキストと研究者のコンテキストが必ずしも一致するものではないことを考え

合わせれば、上記の「現象」の文脈依存性は、当事者の見ている「現象」と研究者の見ている「現象」の間には不一致が起こっている場合があることを示唆する。つまり、「標準的な問題を解き、標準的な実験をして、最後に、パラダイム内の熟達した研究者の指導のもとで研究することによって、……(略)……パラダイムの方法、テクニック、標準を身につけ」(チャルマーズ, 1983)た研究者に見えているものは学範にとって意味のある現象・知見であるにすぎず、当事者にとって意味のある現象・知見ではない可能性がある。荒川(2005)は、このように現在の科学が次の科学的知識を決定している現象を「科学の自己再生産機能」と呼んでいる。

### 1.2 知識生産の手法としての推計学とその適用の問題

以下で論じる知識生産の手法としての推計学の問題は、前述の日本発達心理学会の「心理学・倫理ハンドブック—リサーチと臨床」(古澤ら, 2000)の心理テスト法のフィードバック場面にも、「フィールドワーカー・ショック」の場面にも該当しないが、心理学一般を考える場合には想定しうる問題点である。この点を詳細に論じる前に、心理学が科学的な手法として援用してきた推計学について整理しよう。

心理学においては予測と制御ということが重視されてきた。そのため、既知の属性を持った未知の集団に対する予測と制御を行なうために用いているのが推計学である。これは、紅白の球が入ったブラックボックスの中から球を引き出すメタファーに近い。しかし、ギリース(2004)が、「フランチェスカの議論」(訳書p.198-199)として論じているように、推計学で得られた知見を、他の状況を考慮に入れずにそのまま目の前のそのまま既知の人に適用することは、起こる前の出来事と、起こった後の出来事の混乱であり、未知の集団に関する知見を、そのまま既

知の人物に対して適用する行為であり、適切なものではないと言える。

## 2 オルタナティブな知識観としての物語りとしての知識

「現象」の文脈依存性の問題と、推計学の適用の限界から、荒川（2005）は、「科学的知識」であっても、知識の流通・消費の段階にあっては、非科学的な知と同様、一つの「物語り」として機能せざるを得ない可能性を指摘している<sup>5)</sup>。このような知識観は、3つの問題を提起する。第1は、そのような知のアナーキズムの状態下において知をどう再定義するかという問題であり、第2は、非専門家による知が誰かに対してネガティブな影響を与える可能性をどのように抑えるかという問題である。そして第3は、そのような知のアナーキズム下において無限に産出される物語りにどのように係留点を作るかという問題である。

以下の節では、まず、「知識」であるための最小条件を整理したうえで、知識の再定義を行い、その上で、非専門家によって生産された知が誰かに対してネガティブな影響を与えるのをどのように抑えるかという問題を検討する。

### 2.1 知識の再定義：「知識」の基本形態としての歴史/物語り

人は、日常生活を送りながら、生活知を蓄積していく。これは、人の最も基本的な知識の蓄

積過程であるといえるだろう。日常生活における経験は、常に一回性であり、同じ時間は二度と繰り返されることがない。このような非反復的な時間という考えは歴史と同様であり、生活における知識の蓄積は、歴史記述を単純化したものといえるだろう。

では、歴史記述とは何か。ホワイト(2001)は、「分析なくして歴史を語っても無益なのであり、語りなくして歴史を分析しても見通しが失われてしまう」と指摘している。このことは、ゲイ(1977)による「歴史分析は語りを伴わなければ不完全なものでしかない」という指摘とも一致している。つまり、歴史を記述することは、分析することを通して「じつはありえた過去、その意味で『可能性』に向けて探求を行なう」(鹿島, 2002) 行為であると言える。

これは、すでに起こったことに解釈を加えて、未来の起こりうる可能性に向けて蓄積するという点で、知識の基本形態であり、同時に、「2つ以上の出来事(event)をむすびつけて筋立てる行為(emplotting)」(やまだ, 2000, p.3)であるという意味で「物語り」である。そして、この知識/物語りは、絶対的な真実であるか否かにかかわらず、過去・現在・未来における「可能態を暗示」することで、その後の行動や認識に変容を加えると考えられる。

### 2.2 「物語りとしての知識」と研究の関係

「物語りとしての知識」を、科学的知識のオルタナティブとして考えた時に、知識と学問的研究の関係を整理しておく必要がある。

従来の知識観において、研究で生産される科学的知識は、学問的真実を探求するものであった。しかし、前述の「物語りとしての知識」という知識観に基づけば、学範内で生産されたものであっても生活知とほぼ同じ形式と意味をもつと考えられる。もし、この2種の知識を差別化するならば、生活知はその対象・その文脈で

5) このような知識観は、西村(2001)、「知の暗黙性とローカル性への着目」に基づく社会観に近い。それは、下記の3種の特徴を持つとされている。

①個人の能動性に基づく科学的発見(「個人の情動、意思、コミットメントが、『見えない真実を見る』ことを可能にするのであって、真理は誰かに発見されるのをひたすら待ちわびている実在ではない。)」  
②知の軌跡の不在またはランダム性(「社会の進歩は偶然に左右される傾向が強く、必然性や秩序から遠く離れている。)」  
③価値を生む知の非専門家性(「科学の専門家が創造した知のみが偏重されることなく、局在した特殊な知が有益な役割を果たす。)」

の有用性がすべてであるのに対して、研究で生産される知はその対象・その文脈に重きをおきつつも、別の対象、別の文脈にも波及的に利用可能であることが求められる点である。このような知識の波及のさせ方には、「こうするとこうなる」という形式からなる「未来予測」と、「こうするとこうなる可能性がある」という「可能態暗示」の2種が考えられるだろう。

知識の生産方法においても、この2種の知識は異なる。例えば、大辞泉（1995）が、学問を「理論に基づいて体系づけられた知識と研究方法の総称」と定義しているように、学範で生産される知は、生活知に比べて、知識生産の方法が明示的であるといえることができる。

そこで、次節では、研究において一般に用いられる質的研究・量的研究という手法と共に、前述の「未来予測」・「可能態暗示」という2種の知識の波及のさせ方について論じ、「物語りとしての知識」の位置づけを明確にする。

### 2.3 「物語りとしての知識」はどのような研究（知識生産）に位置づけられるか？：転用・適用可能な「知識」生産の再分類

厳密に言えば、前述の「物語りとしての知識」は、知識の流通者・消費者から見た知識観であり、生産の方法とは独立している。しかし、ある種の研究は、生産の段階から「普遍的な真実としての知識」ではなく、「物語りとしての知識」を志向しているといえる。この点について整理しよう。

表1は、研究の志向性と研究の種類との関係を示したものである。従来の心理学の中心であった実験・調査や法則定立型の研究は、予測と制御が目的であるので、未来予測志向の量的研究となる。他方で、表1のうち、網掛けで示した部分が知識の生産場面においても「物語りとしての知識」としての意味合いが強い研究形態であるといえる。歴史や個人の事例の記述は、可能態を暗示するという形態で研究として成立する。他方やまだ（2001）が質的研究のひとつ

表1 研究の志向性と研究の種類との関係<sup>注)</sup>

	未来予測志向 ←	→	可能態暗示志向
量的研究	推計学を用いた 実験／調査 法則定立的研究		双対尺度法などの非推計学
質的研究		多人数に対する調査に基づく モデル構成	事例研究 個性記述的研究

注 グレーの網掛けのところが生産場面においても「物語りとしての知識」としての意味合いが強い部分。流通・消費場面においては、すべて「物語りとしての知識」であるといえる。

表2 研究の志向性と成果として考えられるものの例との関係

	未来予測志向	可能態暗示志向
量的研究	科学的真実の探求 政策決定 製品・技術開発	多様性理解
質的研究	社会構成的な真実の探求	当事者理解 可能態の暗示 選択肢の明示 リスクとベネフィットの明示

の形態として提唱した、モデル構成は、多人数のデータに基づいて、概念をある程度抽象化することで、ある程度の未来予測志向性をもつ。ただし、この場合の未来予測は、幅を持った予測であり、事例や歴史の記述のような可能態の暗示と連続性を持つ。

表2は、研究の志向性とその研究で得られた知識の利用方法としてふさわしいものの関係を示したものである。推計学に基づいた法則定立的な研究は、科学的な真実を探求し、政策決定や製品・技術開発といった、未来に起こることに対しての決定には有用であると考えられる。また同じ量的な研究でも、可能態暗示志向の研究の場合は、可能態を暗示するにとどまる。他方、質的研究の場合には、未来予測志向であっても、可能態暗示志向であっても、量的研究とは異なった機能を持ち、現象の理解や、リスクの管理などの面において有用な意義を持つ。

以上の問題は、知識の生産場面における問題である。しかし、「物語としての知識」という知識観に基づくならば、知識の生産段階だけではなく、その流通と消費段階に関しても配慮することが必要である。そこで、次節では、知識の流通・消費をどう扱うかについて論じる<sup>6)</sup>。

## 2.4 「物語りとしての知識」の流通のガバナンス

前述のように、荒川(2005)は、「科学的知識」も、適用場面においては、一つの物語りとしてしか機能しない可能性を指摘した。知識を物語りだと考えた時、2種の問題が引き起こされる可能性がある。第1は、科学的な検証が行なわれていれば流通されることのない、問題を引き起こす知識（以下、「悪しき物語り」と呼ぶ）

6) 現在、大学等の心理学専攻では、知見の生産の仕方は習うが、それをどのように流通させて消費者に提供するかについての授業は、あまり行われていないと思われる。他分野（浅島，2005；林・加藤・佐倉，2005；渡辺，2005）に倣い、心理学をはじめ人文科学領域においても知識の流通と消費の方法をカリキュラム内に組み込むことの必要性がある。

が流通する可能性であり、第2は、現状追認的になってしまう可能性である。なぜなら、クラインマン(1996)が、物語りの妥当性として、「現実との一致」、「首尾一貫性」、「ある個人の問題という文脈において有用なこと」、「美的価値」の4点を挙げているように、物語りが流通する際には、本当に正しいか否か、気づかないところで誰かにネガティブな影響を与えていないか否かは問題とならないからである。

以下の節では、この2種の問題点を克服する方法について論じる。従来の学範主導の知識の検証によらずに、「悪しき物語り」の流通を防ぐには、2つの方法が考えられる。第1は、学範主導型の知識評価（ギボンズ(1997)のモード1）から現場主導型の知識評価（モード2）にその評価の保留点を変えることであり、第2は、可能態として未来を提示することである。

### 2.4.1 「悪しき物語り」に対する対応する1： 現場主導型の知識生産における評価

「悪しき物語り」の流通を防ぐための第1の方法である現場主導型の知識評価に関しては、臨床的な立場から2種の評価方法が提案されている。

第1は、Kazdin(1999)やJacobson, Roberts, Berns, & McGlinchey(1999)が提案した、臨床的有意性(Clinical significance)という概念である。この臨床的有意性とは、学範志向的な統計的有意性(statistical significance)に対抗するために作られたものであり、Kazdin(1999)によると「ある介入の効果の実践的、応用的価値や、重要性」を示すものであり、「その介入が、そのクライアントや、クライアントが関わる人々の日々の生活において実際的な違いを生み出すかどうか」に着目したものである。臨床的有意性の概念は、その介入の有効性の可否を検討することを前提としているという点で、前述の未来予測志向・量的研究に該当する。

「悪しき物語り」の流通を防ぐための第2の方法としては、応用行動分析学における社会的妥当性（Wolf, 1978）という概念が挙げられる。Wolf（1978）は、社会的妥当性を評価する基準として下記の3点を挙げている。

1. 研究者が達成しようとするその目標は当事者や社会と共有されているか？
2. 研究者が考えている介入は、この研究の調査参加者や消費者に受容可能か？
3. 研究の消費者たちを満足させる結果を産出することができるか？

社会的妥当性も、査定し、その介入の有効性の可否を検討することを前提としている点で、前述の未来予測志向・量的研究に該当すると思われる。

これらの概念は、知見の消費者の立場に立っているために、前述の「フィードバックの際の注意点」のような問題は起こりえない。

#### 2.4.2 「悪しき物語り」に対する対応2：「物語りのリスク」

「悪しき物語り」に対応する方法として、本論では、「物語りのリスク」という概念を提案する。これは、実験・量的心理学によって得られたものであれ、現場・質的研究によって得られたものであれ、様々な可能態を明示することで知識の流通・消費の調整を行なうことを目的とする点で、前述の臨床的有意性や社会的妥当性という概念と異なっている。この方法は、研究の知見が真実かどうかではなく、その物語りを信じて使用・消費することによってどのようなリスク、またはベネフィットがあるかという可能性を記述する方法である。

ここでは、この「物語りのリスク」の実際の適用例として、血液型性格関連説を取り上げてみよう。血液型性格関連説とは、古川竹二によって1927年に提唱された説であり、その骨子は、血液型によって先天的に性格が異なるとするも

のである。この説は、心理学者が「科学的調査」の結果を根拠に否定しているにもかかわらず、日本や他のアジア諸国において、たびたび流行していることが指摘されている（e.g. 佐藤・渡辺, 1992, 1995；佐藤, 1993）。

しかし、この説を厳密な意味で否定するのは非常に困難である。その理由は、差がないということを経験的検定によって証明することの難しさにも関係するが、ここでは、その難しさを思考実験を用いて検討してみよう。

たとえば、血液型検査といわゆる「性格テスト」を日本中のすべての人に対して課したとする。そして、血液型別にテストの得点の平均値をとったとする。すると、全血液型でその平均値がまったく同じになるとは考えられない。必ず各血液型によって僅少なながら差が出るだろう。もちろん、同じ「性格テスト」であっても同じ人が同じ得点を毎回とるとは限らず、性格テストの誤差の範囲内であるだろう。また、亡くなる人も生まれる人もいるので、この平均値の大小は一定しない。しかし、因果関係としては不明にしても、その瞬間において血液型ごとに性格テストの結果が異なるのは確実である。

また、たとえ、全血液型で完全に平均値が同じであっても、血液型性格関連説を主張する人が本質主義の立場をとり、血液型によって本当は性格が異なるが、環境の影響などで実際には差がないように見えると主張すれば、もはや検証は不可能になる。

このような理由で、血液型性格関連説を完全に否定するのは難しい。これに対して、「物語りのリスク」の概念は、血液型性格関連説という物語りを否定するものではなく、血液型性格関連説を信じることによって、どのような問題が起るのかを記述することで、その物語りの流通・消費の問題点を指摘する方法である。実際に、2004年にテレビ番組を中心に流行した血液型と性格を結び付ける報道に関しては、「血液

型で人を分類、価値付けするような考え方は社会的差別に通じる危険がある」などのリスクが明示されたことと、それに反応した放送倫理・番組向上機構 (BPO) 「放送と青少年に関する委員会」が2004年12月8日に「自粛要望」をだしたことにより収束したことが指摘されている (上村・サトウ, 2005)。

以上で示したように、物語りのリスクという概念は、知識の消費の段階から知識の生産の段階に向けてそのあり方を問うものである。このことは消費の段階を考えた場合、真実かどうかはもはや意味がなく、その知識を信じた場合に何が起るのかということの方が重要であることを意味している<sup>7)</sup>。

## 2.5 現状追認性に対する対応：フィクションとしての物語りの生成

ブルーナー (1999) が、物語りモードの特徴として記述しているように、Aという出来事とBという出来事をつなぐ物語りには複数の物語りが語りえる<sup>8)</sup>。学範内では荒川 (2005) が Newton-Smith (1987) のよりよい科学理論の条件を分析して「学範のアイデンティティを維持することに関係する項目」の存在を指摘したように、研究者それぞれが背負った文脈に基づいて常識的で飛躍のない物語りを選ぶとする。これが、科学が現状追認的になってしまう理由の1つである。

これは量的研究に限らず、質的研究にも言えることである。これを防ぐために、質的研究に

7) 逆に、「実際にはどうしてもよい知識が広がり科学的にまた将来を考える上で重要な物語りが広がらない」という可能性も考えられる。このような場合、より「美的価値」の高い物語りをつくるのが有効な方法だと考えられるが、今後の検討課題であると思われる。この点については、査読者の先生からご指摘をいただいた。

8) もちろん厳密にはAという出来事、Bという出来事がどのような出来事であるか、またそもそも起こったとするかどうかにも理論負荷性の問題がある。

においては、著者の関心や立ち居地を描くことによって、これを相対化してきた (西條, 2003; 松嶋, 2004)。しかし、これをもっと相対化することができるのではないだろうか。

図1は、XとYという2つの事象の関係の物語り方の関係を、研究者Cの視点を中心に図示したものである。 $Z_A \cdot Z_B \cdot Z_C$ はそれぞれのアクターが知っている (あるいはそのアクターにとって意味を持つ) 知識を示す。研究者Zが持つ $Z_C$ は学範において蓄積された知識ということになる。なお、この図は、相対的なものであり、当事者Aの視点を中心に図示すればXとYと当事者Aだけに見える (あるいは意味がある)  $Z_A$ が直線上に並び、研究者Cからみた合理的な物語りは湾曲した線 (過剰な物語りを含んだもの)、またはXとYの途中で途切れた線 (十分な説明力を持たない) として描かれるだろう。また、何が合理的であるかは、天動説と地動説の関係と同様に、価値付けや文脈により、どういう目的・立場で見たかに依存する相対的な問題である (e.g. Kuhn, 1962)。

ここで、合理的であるかどうかを基準からはずし、どのような物語りを作ることが、誰の利益になるか、または誰かのリスクになることはないかということを基準において物語りを作るよう努めることは無意味ではない。

また、複線経路等至性モデル (サトウ・安田・木戸・高田, 印刷中) が、現在を相対化するために推奨している、両極化した等至点に倣い、複数の事象間をつなぐ物語りとして可能な物語りがあるならば、それを記述することにも意味があるのではないだろうか。たとえば、本論自体が、学範において妥当とされている暗黙の学問観とは異なる物語りを描いているといえる。

## 3. まとめ

本論では、「科学的知識」とその社会におけ



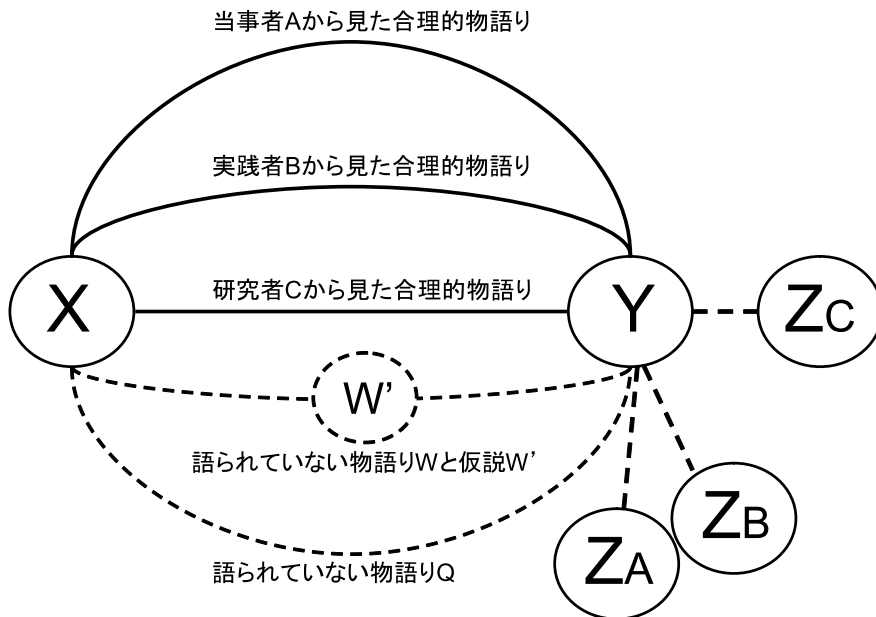


図1 事象と物語り方

る価値とが一致していないにもかかわらず、「科学的知識」がその他の知識を駆逐している可能性を指摘した上で、社会的な価値に基づいてはいるが「科学的知識」ではない知識の可能性として「物語りとしての知識」について検討を加えた。「科学的知識」ではない知識のありうる特徴として、真実さではなく、その知識の潜在的な消費者本人およびその他の人にとって、その知識を受容することのベネフィットとリスクを付与した形で、流通・消費する必要があることが示唆された。

また、本論では、妥当な物語りという概念にも疑いの目を向け、真実かどうかではなく、可能な物語りを描くことが現在の視点を相対化する上で重要であることを指摘した。この点については、まだ議論が尽くされてとは言えず、今後の更なる検討が必要である。

### 引用文献

荒川歩（2005）心理学は「科学的」でなければならないのか？：質的心理学と実験心理学の対立と社会

との関係を軸に. 立命館人間科学研究. 10, 29-35.

浅島誠（2005）科学を社会全体の知的財産として表現できる科学コミュニケーション. 遺伝, 59, 81-83.

ブルーナー, J. (1999) 岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子（訳）意味の復権. フォークサイコロジーに向けて. 東京：ミネルヴァ書房.

(Bruner, J. 1990 *Acts of meaning*. Harvard University Press.)

チャルマーズ, A. F. (1985) 高田紀代志・佐野正博（訳）. 新版 科学論の展開. 東京：恒星社厚生閣.

(Chalmers, A. F. 1982 *What is this thing called science?* St. Lucia, Qld: Open University Press)

古澤頼雄・齊藤こずゑ・都築学（2000）心理学・倫理ガイドブック—リサーチと臨床. 東京：有斐閣.

ゲイ, P. (1977) 鈴木利章（訳）. 歴史の文体. 京都：ミネルヴァ書房.

(Gay, P. 1975 *Style of history*. New York: Basic Books)

ギボンズ, M. (1997) 小林信一（監訳）. 現代社会と知の創造：モード論とは何か. 東京：丸善.

(Gibbons, M. (1994) *The new production of knowledge: The dynamics of science and research in contemporary societies*. London: Sage Pub)

ギリース, D. (2004) 確率の哲学理論. 東京：日本経済新聞社.

- (Gillies, D. 2000 *Philosophical theories of probability*. Routledge)
- Hanson, N.R. (1958) *Patterns of discovery*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 林衛・加藤和人・佐倉統 (2005) なぜいま「科学コミュニケーション」なのか?—特集にあたって—. 遺伝, **59**, 30-34.
- Jacobson, N. S., Roberts, L. J., Berns, S. B., & McGlinchey, J. B. (1999) Methods for defining and determining the clinical significance of treatment effects: description, application, and alternatives. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **67**, 300-307.
- 鹿毛雅治 (2002) フィールドに関わる「研究者/私」: 実践心理学の可能性. 下山晴彦・子安増生 (編著). 心理学の新しいかたち: 方法への意識. 京都: ミネルヴァ書房 (pp.132-172.)
- 鹿島徹 (2002) 記憶の共同性と文学. 小森陽一・富山太佳夫・沼野充義・兵藤裕己・松浦寿輝 (編). *フィクションか歴史か*. 岩波書店 (pp. 41-59.)
- Kazdin, A. E. (1999) The meanings and measurement of clinical significance. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **67**, 332-339.
- クラインマン, A. (1996) 江口重幸・五木田紳・上野豪志 (訳). 病いの語り: 慢性の病いをめぐる臨床人類学. (Kleinman, A. 1988 *The illness narratives: Suffering, healing and the human condition*. New York: Basic Books.)
- Kuhn, T. S. (1962) *The structure of scientific revolutions*. Chicago: University of Chicago Press.
- 松嶋秀明 (2004) 質的研究に、もっと研究プロセスを. 発達心理学研究, **15**, 292-295.
- 松嶋秀明 (2005) 関係性のなかの非行少年: 更生保護施設のエスノグラフィーから. 東京: 新曜社.
- 奈須正裕・鹿毛雅治・青木紀久代・守屋淳・市川伸一 (1993) 教育心理学会第34回総会自主シンポジウム「教育心理学の実践性をめぐって」報告書. 教育心理学フォーラム・レポート, FR-93-003. 日本教育心理学会.
- Newton-Smith, W. (1987) *The rationality of science*. London: Routledge & Kegan Paul.
- 西村友幸 (2001) 知のボランティアズム. 寺本義也 (編). 知の神秘と科学. 東京: 新評論 (pp.98-142.)
- 西條剛央 (2003) 「構造構成的質的心理学」の構築: モデル構成的現場心理学の発展的継承. 質的心理学研究, **2**, 164-186.
- 佐藤達哉 (1993) 血液型性格関連説についての検討. 社会心理学研究, **8**, 197-208.
- サトウタツヤ (2002) 教育心理学の不毛性論争. 教育心理学年報, **41**, 139-156.
- 佐藤達哉・渡邊芳之 (1992) 現代の血液型性格判断ゲームとその心理学的研究. 心理学評論, **35**, 234-268.
- 佐藤達哉・渡邊芳之 (1995) 古川竹二の血液型気質相関説の成立を巡って—大正末期～昭和初期におけるある気質論の成立背景. 性格心理学研究, **3**, 51-65.
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩絵・高田沙織・Valsiner, J. 印刷中 複線経路・等至性モデル: 人生経路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して. 質的心理学研究, **5**.
- 小学館『大辞泉』編集部編 (1995) 大辞泉. 東京: 小学館
- 上村晃弘・サトウタツヤ (2005) 血液型性格関連説の最近の動向と問題点 (3). 日本パーソナリティ心理学会第14回大会発表論文集, 37-38.
- 渡辺政隆 (2005) 科学コミュニケーション人材の養成に向けて. 遺伝, **59**, 75-80.
- Wagner, R. (1981) *The invention of culture*. Chicago: University of Chicago Press.
- ホワイト, H. (2001) 海老根宏・原田大介 (訳). 歴史における物語性の価値. H. ホワイト (著). 物語と歴史. 東京: 《リキエスタ》の会 (pp.7-55.) (White, H. 1981 The value of narrativity in the representation of reality. W. J. T. Mitchell (ed) *On narrative*. Chicago: The University of Chicago Press.)
- Wolf, M.M. (1978) Social validity: The case for subjective measurement or How applied behavior analysis is finding its heart. *Journal of Applied Behavior Analysis*, **11**, 203-214.
- やまだようこ (2000) 人生を物語ることの意味: ライフストーリーの心理学. やまだようこ (編). 人生を物語る: 生成のライフストーリー. ミネルヴァ書房 (pp.1-38.)
- やまだようこ (2001) <sup>フィールド</sup>現場心理学における質的データからのモデル構成プロセス. 質的心理学研究, **1**, 128. (2005. 12. 1 受稿) (2006. 1. 25 受理)